

1960年代の国際的視点に立つ検討 油井大三郎編 『越境する一九六〇年代——米国・日本・西欧の国際比較』

(彩流社、2012年)

新川 健三郎

1960年代は、第二次世界大戦後のアメリカ合衆国（以後アメリカ）はもとより、国際社会全体にとっても、重大な変動がみられたきわめて意義深い時期であった。なかでも注目すべきは、それらの変動が国際関係や各国の政策レベルの領域だけではなく、民衆の運動の分野で強力なエネルギーをもって脈打ち、かつ国境を越えて影響を及ぼしあう広がりをも帯びていたことであろう。本書はまさにそうした現代の歴史の動きを考察し、理解を深めるうえで基本的というべき課題に、当然必要とされる研究者の共同作業を通して生み出された学術的分析の成果である。

本書の内容に関する検討や議論に入る前に、この研究活動の成り立ちや構成、あるいは問題関心について、説明を兼ねて言及する。「あとがき」で述べられているように、本書は4年間にわたる科学研究費・基盤研究の助成を受けた「一九六〇年代の米国における社会運動の越境と文化変容に関する総合的研究」の成果であるが、さらにそれと関連して開催された国際シンポジウムでの報告も生かされている。その主旨は「一九六〇年代の社会運動に関する学術的、実証的研究」にあるが、そこではアメリカが分析の主軸たる位置を占めているにせよ、西欧や日本専攻の研究者の参加により「国際比較」の追求がなされている点に重要な意義があり、1960年代のアメリカの様々な問題に関する近年の様々な研究活動の成果のなかにあって、本書の際立った特色はこの「越境」の点にある。

したがって本書の担当は16名（日本以外4名）の多数に及んでおり、その構成も、まず編者による「序章」において、全体の要ともいえるべき新左翼の思想や運動についての国際比較をふまえた総括的な検討がなされたうえで、第Ⅰ部で学生運動、ヴェトナム反戦運動、環境保護運動、第Ⅱ部でアフリカ系と先住民のマイノリティ運動、第Ⅲ部で女性運動や福祉権運動、という主要な領域について、アメリカ国内の問題状況と越境の側面が分析され、第Ⅳ部のヨーロッパの学生・知識人運動を軸にした考察へとつながる、スケールのきわめて大きな内容となっている。このプロジェクトについて、編者は「一九六〇年代を経験した世代と経験していない若い世代の研究者による」とし、「経験した世代にとっては自分の青春時代を再訪する懐かしさと苦しさがあった」と述懐しているが、これは60年代に留学生としてアメリカでの生活経験をもつ評者の心に深くしみこむ指摘でもあった。実際に1960年代はすでに歴史的分析の対象となる時期となっているが、他方で世代によっては「同時代史」的な意味合いを濃厚に有しており、その点本書は評者に通常の歴史書とは異なる特別な感慨を覚えさせてくれたことを付記したい。

ニューレフトの運動形態の「越境」性

1960年代の民衆運動や問題状況を把握するには、まず当時の社会的変動の推進力ともなったニューレフトを理解することが、その前提として不可欠であり、この点本書でも「序章」で油井大三郎により包括的かつ要を得たニューレフト論が提示されている。とくに西欧諸国の政治的・社会的条件や歴史的背景の相違により、ニューレフト的動向にもいかなる多様性が生じていたか論究する油井の議論は、国際比較を主旨とする本論集の格好な導入となっている。また新左翼運動の急進化とその原因、またそれと関連する学生運動の時代区分や思想の展開、さらには特別な意義をもつといえる1968年の画期性の検討から新左翼の衰退原因やその遺産の評価まで視野に入っており、いわばニューレフトの一つの全体像といったものを示す好論となっている。

だが国際比較の面を重視するが故に、地域的には本書の主部をなすアメリカ自体のニューレフト論としては、その動員力の可能性に関し疑問が残る。もとより1962年に発表されたSDS（民主社会をめざす学生組織）の組織憲章たる「ポート・ヒューロン宣言」に注目して、その経緯や立場、あるいは組織面での特色に簡潔に言及している。この「宣言」は従来のアメリカ社会の支配的な価値体系に対する根本的批判、直接民主主義の理念に立脚した参加民主主義の実現の主張、高度産業社会における学生の存在規定といったようなラディカルな要素を含んでいたが、その急進的な性格が明確であるだけに、かえって何故にこのニューレフトの運動が広い大衆の基盤を獲得することができたのか問題となろう。あるいはアメリカの旧左翼があまりに微力であったことを考えると、旧左翼と対比しての新左翼の大衆性の特質の検討も有意義なアプローチといえよう。

この点「宣言」でも参加民主主義を標榜していたが、評者はニューレフトの大衆動員力を可能にした運動形態に関し、適切な表現とはいえないが、イシュー（争点）中心の運動としてその特質を把握しようとしたことがある。¹⁾ 端的にいえば、人種差別の撤廃であれ、ヴェトナム戦争反対であれ、各自の政治的立場やイデオロギー面での差異を越えて、イシューに関して賛同する者の結集が図られたわけだが、これはイデオロギー的路線が死活的なほどに重視されていたアメリカの旧左翼とはきわめて対照的だったといえる。評者の身近な経験でも、ヴェトナム反戦のティーチインやデモに左翼的な学生は当然のことながら積極的に参加したが、他方保守的な立場に立つ学生の姿もみられた。彼らの立場としてはヴェトナム戦争は自身が信奉するアメリカニズムの理念に鑑み反対せざるをえないから、参加は当然ということになる。こうして「宣言」ではきわめて急進的な思想が提示されながら、運動への動員に関しては開放的性格が強かったこともあって、ニューレフトのイシュー中心の運動には政治的立場やイデオロギーの面での境界を越えて結集するという意味での「越境」的状況が出現し、それが一つの重要な特色をなしていた。

こうしたニューレフトの運動形態は、旧左翼が組織の存続自体に腐心せざるをえなかったのに対し、大衆動員の面で際立った成果をあげた。だがそれは運動のあり方とか発展の展望という点で、自己矛盾ないし弱点を孕んでいたともいえる。SDS等の運動の核や指

¹⁾ 新川健三郎「1960年代におけるアメリカの支配体制の動揺と民衆運動」『歴史学研究』No. 573 (1987年10月)、185-186頁。

導部は「宣言」の理念で武装していたにせよ、開放性に依拠した運動では逆に強固な政治的組織としての育成に困難が伴う。例えば公民権運動が人種差別廃止に取り組む過程で黒人解放さらには体制変革志向といった運動としての「発展」を目指すと、「越境」的結集をもとにした大衆的動員は否応なく崩れざるをえなくなる。またニューレフトの運動は参加すればもとよりその一員という意識をもつにせよ、デモが終り帰宅すれば何でもなくなるといった感慨を述べる学生もいたが、確かに旧左翼とは異なり、この運動は持続的組織というよりは動員と参加が生命そのものという性格を有していたことを否定できない。ましてや 이슈が達成されたり消滅したりすれば、運動としても衰退に向う運命が避けられなくなる。最後に運動の中心的担い手が学生など比較的若い層に移ったことも、統率を重視した旧左翼とは違って、ビューロクラティックな秩序や規律を嫌う様相を強め、こうしたことも運動の強弱両面と関連があるといえよう。以上60年代の激動を生み出す動因ともなったニューレフトの運動形態に言及したが、これらの諸点のうちどれほどがアメリカ固有ともいべき要素と考えられるのか、逆に日本や西欧との共通性として注目すべきなのかにも関心をもって、諸々の運動の分析に目を向けることにする。

アメリカの社会運動の越境性の諸側面

1960年代のアメリカにおける社会運動の学術的分析が豊富に蓄積されてきているなかで、本書の最も意義深い特色は、前にも触れたように国際的越境の側面に着目し、日本や西欧の運動との国際比較に取り組んだ点にある。これは国内の分析を越える広い視野や問題関心を要する作業であり、困難さをも伴うことであるが、こうした挑戦的ともいえる課題に関し、各論稿は全体としてきわめて優れた成果を生み出し、従来の研究書とは性格の異なる60年代論となり、かつ新たな学術的問題提起の役割も演じているといえる。

第I部はニューレフトとヴェトナム反戦運動が主題であるが、まず「民主的文化、社会変革運動、そして国際的六〇年代」(デーヴィッド・ファーバー)で、この時期のアメリカの新たな思想的あるいは文化的潮流を概括し、そうした動きがヴェトナム戦争批判などを通していかに国際的な広がりをもったか指摘するが、とくに「文化的反乱」の側面への論究は注目に値する。ついで「『三つの世界』のなかのアメリカ『六〇年代』」(梅崎透)はアメリカの運動自体が「第三世界」の影響を受けたり、それと連動する面がいかに強かったかを論じ、さらに具体的な知識人の活動として1965年に結成されたニューヨーク自由大学をめぐる動きを詳細に検討し、そこに国内のみでなく国境を越えたラディカルな知識人ネットワークの意味合いがあったことを強調する。「アメリカにおけるヴェトナム反戦運動とその遺産」(藤本博)は、アメリカの戦争犯罪の告発が国際的に大規模な展開をみたことをこの戦争の特徴の一つとして重視し、反戦ヴェトナム帰還米兵の組織(VVAW)の活動を「ラッセル法廷」などと関連づけながら考察し、さらに70年代に入ってから「冬の兵士」調査会のみならずイラク戦争に関する「冬の兵士」公聴会まで視野に入れた特筆すべき分析となっている。「米国環境運動をめぐる二つの越境」(小塩和人)は、一般に70年を契機に顕在化したとみられている環境運動が、いかに60年代の社会運動に根ざす要素があったかを掘り起こし、さらに越境の側面ではとくに日本の公害問題をめぐる動きとの関連性を明らかにしたユニークな議論となっている。

第Ⅱ部のマイノリティ運動の領域では、まず「ガーナにおけるアフリカ系アメリカ人亡命者と一九六〇年代の『長く暑い夏』」(ケヴィン・ゲインズ)が従来のアメリカの公民権運動研究では十分に視野に入っていたとはいえないアフリカとの関連性にメスを加え、とくにガーナにおけるアフリカ系アメリカ人亡命者の存在意義などに着目して「アフロ・アメリカ」について再考する新しい視座を提示している。他方で『『公民権物語』の限界と長い公民権運動論』(藤永康政)は国内の分析に焦点を絞っているが、従来の二元論的理解を基にした公民権運動の把握に対し、二つの立場の対話や確執を検討しながらその新たな歴史像を提起しようとする意欲的な作業である。なかでも運動指導者と社会主義労働党といった左翼との連携の側面や、デトロイトのグラスルーツ急進主義とキングとの接点などの検討は、より鋭い切り込みと洞察力のある究明に道を開いている。「一九六〇年代の先住民運動」(内田綾子)はレッド・パワーが国内越境の動きをいかにエネルギー結集の基盤として生かしたか重視しながら、アルカトラズ島占拠等の動向を考察する一方で、国際越境の側面についてもカナダへの波及や第三世界の脱植民地化を目指す動きとの連帯などの重要な問題に論及する。「アメリカの福祉権運動と人種、階級、ジェンダー」(土屋和代)は60年代研究において福祉権運動への取り組みが弱かったことを指摘しつつ、なおかつ今日重視されている福祉権の問題が深く60年代に根ざしており、「貧者の行進」が通常の公民権とは異質の人種を越えた福祉権をめぐる問題提起の性格を帯びていた点を強調するなど、この時期の社会的運動を促す要素としての意義を明らかにしている。国際越境の面の考察を欠いてはいるが、全米福祉権団体(NWRO)などの検討は60年代の黒人解放運動さらには女性解放運動の分析に新たな展望を開く可能性を有している。

第Ⅲ部は女性運動に取り組むが、まず「リスペクタビリティという問題」(ベス・ベイリー)は越境ではなく、国内の動向に焦点を当てる。そこではリスペクタビリティの問題を重視しながら、全米女性組織(NOW)を中心とするリベラル・フェミニズムとより根本的なジェンダー認識の変革を打ち出したラディカル・フェミニズムの比較検討をふまえて、70年代の運動の高揚に至る過程として60年代を位置づけている。「ニューヨークの女性解放運動とラディカル・フェミニズムの理論形成」(栗原涼子)は、アメリカのフェミニズムが理論的また歴史的にフランスの影響を受けた点に論及したうえで、ニューヨークラディカルウイメンからレッドストッキングズへと展開する運動を検討するが、とくにその過程でヴェトナム反戦運動との連動性やプロウマンの立場からのニューレフト批判など注目すべき動きを論じ、さらに家事労働有償化の問題ではヨーロッパにおける運動へと視野を拡大している。「日本のウーマンリブと『女のからだ』」(豊田真穂)はもとより地域的には日本を対象とするが、日本のウーマンリブがたんなるアメリカからの輸入品ではないとの基本的認識に立ちながら、双方の関連性にメスを加え、日本における中絶禁止法反対とかピル解禁論争、さらには国境を越えた「女のからだ」をめぐる認識の問題状況に論を進めている。

これまでは地域的にはアメリカを軸に据えた越境あるいは国際比較の分析であったが、第Ⅳ部はヨーロッパ側に視座を移しており、通常の60年代アメリカ研究の射程外にある分析作業として、本共同研究にあって特別な寄与をなしている。最初の「ヨーロッパにおける『一九六八年』」(ヨアヒム・シャルロート)はヨーロッパの思想がアメリカの運動に影響を及ぼす一方、アメリカ側の抗議方法や理念がヨーロッパの活動家を政治化するのに

決定的な役割を演じた」と指摘し、その過程で反権威主義的な立場や戦略が大西洋を越えて異なる社会に根をおろした動きを当然視する。そしてヨーロッパの各地で抗議活動が頂点に達する「一九六八年」についても、アメリカとヨーロッパの運動に共通したトランスナショナル性というべき側面に重要な特色を見出し、さらにそれは政治問題だけでなく、ヒッピーなどの生き方やポップ・カルチャーの次元にまで広がりをみせる。こうして新たな市民社会の活性化や参加民主主義を動因とした伝統的な社会秩序を揺るがす動きが、西ドイツ、フランス、イタリアで、それぞれの問題状況に即して顕在化する。「西ドイツ新左翼における『アメリカ』の受容」(井関正久)は西ドイツにおけるドゥチュケを理論的指導者とする社会主義ドイツ学生同盟(SDS)を軸に、米独間の運動の交流やアメリカ式抗議スタイルの実践、ブラックパワー運動との連帯等の動きを検討し、70年代にまで視野を拡大しながら、西ドイツ新左翼におけるアメリカ的要素の意義を論じる。「一九六〇年代フランスにおける政治文化の形成」(中村督)では、フランスのニュース週刊誌『ル・ヌーヴェル・オブセルヴァトゥール』に着目して、青年層の日常生活の政治化や政治意識の覚醒を目指す活動を追跡し、左翼行動主義の出現が68年「五月」を契機にするにせよ、その萌芽が60年代を通していかに形成されていたかを考察する。さらにここでも妊娠中絶の合法化など「政治」の結実として70年代への運動の持続的意義を強調している。アメリカのみならず西ドイツやフランスにおいても「六八年」は運動の高揚という点で重大な意味を有していたが、「イタリア・カトリックの『六八年』」(八十田博人)はイタリアの「六八年」におけるカトリックの学生と聖職者の抗議運動の思想や活動の過程にメスを加えたユニークともいえる分析である。しかも「長い六八年」の時代認識があるようにトレントやミラーノの大学占拠で始まった運動は1977年までの長期にわたるが、そこではカトリック社会思想が重要である一方、カトリック大学が先鞭をつけた運動が国立大学などへと拡大、発展するなかで、問題関心の点でも変化が生じる。また抗議運動の急進化や社会化とともにカトリック教会が主戦場でなくなる一方、カトリック社会の内部もこの長い過程で影響を受けるといった注目すべき動きが認められるのである。

国内の諸運動間の「越境」と変動

アメリカの運動と海外との関連あるいはその国際比較は、アメリカの60年代分析に新たな照射を可能にし、より広い展望を開く示唆に富む作業となっている。同時に「越境」という視点から考慮した場合、政治的立場とか国境とは別の次元のもう一つの「越境」性が認められ、運動の進展に重要な役割を演じたように思われる。それは諸々の運動間の相互連関といったものだが、学生運動、公民権運動、女性運動、反戦運動等はすべて相互に境界線を引けるものではなく、重層的に絡み合っており、出現から展開の過程で影響を及ぼしあい、それが変動を促す動因ともなった。60年代のアメリカの状況はこうした点にも重要な特質が認められよう。

学生運動にしても、SNCCの公民権が問題関心の中心だった状況から、ヴェトナム反戦のティーチインやペンタゴンデモ、さらには軍事研究批判も牽引力となって大学変革の要求へと動いていく。公民権運動も国内の人種差別廃止の要求から、キング牧師の立場に端的に示されるようにヴェトナム反戦の問題意識が鮮明になるとともに急進化の方向に傾

斜する。女性運動の面でも 1964 年公民権法への性差別禁止条項の挿入や他の運動の男性優位的状況への批判などが、進展を促す刺激となったことは否定できないのである。

最後に本論集では、越境の側面に重点をおくために止むを得ないことではあるが、アメリカ国内の運動を考えるうえで無視できない問題、例えば南部と北部の人種問題の差異、都市暴動、大学キャンパスでのティーチインや国際反戦デーのデモ、コロンビア大学紛争の実態、あるいは女性運動のうねり等が十分にカバーされていない。本書はこうした一般的なことは習得済みの層を念頭においた作業といえるが、やはり 60 年代の熱気がそれに相応しく伝わってくるとはいい難く、そこに国際比較に比重をおいた研究と国内分析との関連のある種の難しさを感じる。